

## 発達障害のある子どもへの支援

### ～親子への支援の重要性～

講師 白百合女子大学 人間総合学部

発達心理学科 教授・副学長 宮本信也先生



令和3年7月9日(金)から21日(水)の間、YouTubeでの限定公開にて講演会を開催いたしました。講師には、宮本信也先生をお招きし、「発達障害のある子どもへの支援～親子への支援の重要性～」というテーマでご講演いただきました。概要は以下の通りです。

心の問題の診断名には世界的な分類、診断基準があります。それがアメリカ精神医学会の作成したDSMであり、新版が出ると世界中において自国の言語で翻訳されます。日本では子どもに関する診断名は2014年から「disorder」を「症」と訳すことに決定しました。発達障害は6つに分類されています。この講義ではその中の自閉スペクトラム症を中心に話します。理由としては、自閉スペクトラム症の子は多様な困難に遭遇しやすく、また対応に苦慮するためです。さらに未だに誤解されている部分が少なくないため詳しく解説したいと思います。

#### ○自閉スペクトラム症について

旧版の診断基準では下位分類として自閉症、アスペルガー症候群など4つに分類されていました。ところが知見が積み重なるにつれて区別する必要がないとわかってきました。3～4歳の時点では明らかに言葉の遅れがあり自閉症とのみ診断された子が中学生になってアスペルガー症候群と診断名が変化する事例はいくらでもありました。つまり今までの4つの下位分類は別々のものではなく、その年齢時の状態を見ていただけということで、一つにまとめて自閉スペクトラム症となりました。

自閉スペクトラム症は「状況にあったやりとり行動が困難」「限定された行動、興味、活動の反復(こだわり・固執性)」、この二つを満たすものになります。「状況にあったやりとり行動が困難」は①コミュニケーションや対人行

動が困難、あるいは非常識なやり方で行う②人間関係の確立・維持が困難であることを指し、「限定された行動、興味、活動の反復」は①常同的な運動や遊びの反復②同じことへの固執③感覚刺激に対する過剰な、あるいは過少な反応を指します。

自閉症のイメージは「目と目が合わない」「名前を呼んでも振り向かない」などのイメージが強く、実際 40 年前の医学の教科書にはそのように書かれていました。自閉スペクトラム症には様々なタイプがあり、孤立型（周りの人との関わりを持たない）、積極奇異型（周りの人の中に飛び込んで引っ掻き回す）、受動型（淡々と一人で好きな事をする）などが見られます。

現在は、知的障害を伴わない自閉スペクトラム症の方の多くが通常学級に在籍しています。その特徴例として、「(集団行動は行うが) 自分の都合を優先させる」「言いたいことを一方的に話す」「自己主張が強い」「相手が先輩・先生でも思ったことを言う」「ことばを表面的に受け取りやすい」「言外の意味が理解できない」「注意・叱責に対して混乱、反論が多い」などがあげられます。上記の症状を一般用語で置き換えると「マイペース」「話が通じにくい」「しつこい」などと必ずしも珍しくないように感じます。また発現頻度は世界で 1% の割合でしたが最近の調査では 2~2.5% とも言われています。

こちらが話したことに思いがけないような言葉が返ってくる場合があります。それは示されていない言葉や事柄を推測することが苦手で、示された言葉や事柄だけで判断しているためです。しかし自閉スペクトラム症の人との会話を噛み合ったものにするのは可能です。それは子どもの使った言葉をそのまま使うことです。抽象的な表現ではなく、意味が 1 つに限定出来るような言い方をすると会話は結構噛み合います。

また思いがけないような言葉が返ってくるもう一つの理由に、知能とは無関係に言葉の意味がわかっていないということがあります。自閉スペクトラム症の人は自分が体験した範囲・理解した範囲だけの言葉の理解であることが少なくありません。同じ言葉を使って話をしているので通じていると思っていたら、実はそこに使われていた言葉をお互い別の意味で理解していて、そのことにお互いが気付いていないときに会話の行き違いが起きます。会話の落とし穴です。自閉スペクトラム症児への対応で、何度言っても理解しない、言われたようにやらないという状況においては気を付けましょう。学校の先生には「先生が伝えたい意味内容で 100% 伝わっていると思わない方がいい」とよく伝えていきます。大人が工夫したり、考えたりすることが本当の意味での配慮になります。

## ○ADHD について

ADHD は重い知的障害がある場合、通常は診断されません。

不注意の問題ですが、彼らは決して集中出来ないわけではありません。興味のあることには集中します（ときには没頭）。しかし、見た瞬間に興味湧かなければ全く集中できなくなります。周りからは「やる気がない」など本人の態度に見られがちです。

多動性は「動きが激しい」、もしくは顕著な場合は「じっとしていない」、学校場面では「授業中席を立って歩く」「クラスから出ていく」などの行動や、「座っているけど体のどこかが動いている」静止性多動も見られます。多動は 10 歳くらいで多くの方が落ち着きます。しかし本人は年齢が上がると「何もしなくてじっとしているのが落ち着かない」という気分として感じることは珍しくありません。

衝動性は「順番を待てない」「相手が話しているのに話し始める」などの行動が見られます。加えて最近では「時間感覚の問題」を持っている可能性があると言われていきます。「時間の流れが分からない」「時間がないのにあわてない」「時間があるのに余計なことをしてあるいはボーッとして時間がなくなる」「遅れても平気」などです。私たちはこの時間の感覚を自然と覚えています、ADHD の子は自然には身につけません。

ADHD には 3 つの特徴があり、すべてが認められる場合は混在状態と言い、不注意優勢状態、多動衝動優勢状態に分けられます。不注意優勢状態は女性に多く、気付かれにくいです。

ADHD と自閉スペクトラム症の両方の特徴を持つ子は少なくありません。特に集団場面で対人関係のトラブルが多発する ADHD の人は自閉スペクトラム症の合併を疑う必要があります。もし判断に迷った際はとりあえず両方の特性があるものとして対応を考えるのがよいと思われます。

## ○支援について

基本的に6つの発達障害の中で自閉スペクトラム症の子が一番言葉の通じにくさがあると考えます。そのため自閉スペクトラム症の子への配慮を学ぶと、他の発達障害の子にも汎用できると考えます。具体的には「省略をしない完全な文章で話す」「冗談は控える、皮肉は言わない」「代名詞は指示する名詞を付けて使う、もしくは使わない」などです。代名詞は同じ言葉でも状況によって指し示すものが違います。したがって意味を1つに限定出来るように、「それ」ではなく「そのコップ」と伝えます。時間に関する言葉も具体的な表現の方が伝わりやすいので「この前」ではなく「先週の水曜日9月21日」と伝えます。また、否定的な表現・大声や命令形で言われると自分が非難されたと感じることがあるため、命令形・大声は避けます。「～しなさい」ではなく「～しよう」、「間違っている」ではなく「そこをこんな風にしてみたらいい」など肯定的な表現・用語で話すようにしましょう。

子どもへの対応において忘れてはいけないことがあります。

私たちは、子どもが発達障害と診断された時に「今のうちに何とかしなければ」などの熱い想いに駆られます。「知能の遅れがないのだから、個にあった教え方をすればみんなと同じようになる」というのは明らかな誤解です。限局性学習症児に対してその子たちに合った読み書きの練習をしても、他の子と同じレベルの読み書きはできません。限局性学習症だけではなく、自閉スペクトラム症、ADHDでも知能の遅れがないのでやり方次第でなんとかなるのではと淡い期待、漠然とした思い込みがあるように感じます。その熱意と誤解で悪循環が生じます。例えば、漢字の書き取りと計算問題などの反復学習をさせがちです。その場ではある程度できたとしても、2～3日経ってやってみると、身についてないから出来ません。実施した当初は出来ていたため同じ学習を延々と繰り返しがちです。ただ単に効果がないというわけではありません。この悪循環はなかなか気づかれにくいのです。最初は子どもも一生懸命頑張ります。すると、表面的な成果が見えるし、親が喜ぶため子どももさらに頑張ろうとします。しかしそれが続くと子どもは段々疲れていきます。

人はだれでも自分が苦労しないで覚えた事はいかにして覚えたかを自分では理解していないので、人に分かるように教えることは難しく、それが分からない人のことを理解するのは難しいということです。そのことを忘れると、時間をかけて繰り返し教えようとしてしまうでしょう。そもそも子どもに分かるように教えられていなければ、子どもはできるようにはなりません。さらに上手くいかないことを子どものせいにしてしがちになります。そして「注意や叱責」、「訓練や勉強の強制」、ときに「叱りながらやらせてしまう」ことが繰り返されがちとなります。人によっては「子どもを嫌だと思ってしまう気持ち」が生じてしまいます。ときには子どもへのきつい言葉、無視、拒絶なども見られ、そのことを子ども自身は強く感じます。親が自分のことを嫌がっていると気付くと、子どもはしつこくちょっかいをかけたり、すがつたりするため、ますます子どものことを嫌になってしまうことも起こるかもしれません。

支援は、子どもの特性の理解をベースに行います。例えば、自閉スペクトラム症の子は私たちが自然に覚えてしまえる事柄や物事の流れが覚えられていません。「会話で省略された言葉を補わないで考えてしまう」→だったら省略をしない完全な文章で一つ一つ丁寧に順番を追って説明してあげるとよいかもしれません。ADHDの子は興味があることには集中できるため、子どもが興味を持てるような工夫を考えてみる（例：ゲームのキャラクターを主人公にした文章で漢字を教えるなど）。また、子どもが嫌だと感じないような工夫を考えてみる（例：1枚の問題数を20問→1枚5問×4枚にする）など、大人の知恵で工夫していくのも良いと思われます。

子どもの特性の自然経過を理解することも大切です。ADHDの子は自分が不注意であることを自覚し自分で何とかしようと意識できるようになるのは12歳以降が多いです。ですから小学生の間は忘れないような注意喚起・工夫に加え、忘れても困らないような配慮・工夫も考えておくと良いと思います。

また同年代の子どもと同じに出来るようになることにこだわらない方が良いです。同じようなことをするのは大切ですが、同じようにうまくできなくてもいいと考えます。私は親御さんに対して「前ばかりを見ずに、時々後ろを振り返るとよい」と伝えます。大人はできていないところに目を向けてしまいがちですが、1年前、半年前はどうかを振り返ると焦る気持ちも和らぐかもしれません。子どもが言うことを聞かない、やめない、などの問題行

動は、多くの場合大人の行動が子どもの行動を長引かせていたりします。問題行動を助長している可能性がある行動を一回やめてみると、良くなることもあります。

色々なことを知りたい・やりたいという子どもの気持ちを育てること、色々なことに興味を持てるような環境づくりを大人が整えること、子どもには見たり聞いたり色々なことにチャレンジさせ、子どもの世界を広げてあげることが大切です。子どもが興味を持てるものを探す道のりと考えて、続かなくてもいいです。子どもが今を楽しんでいたらいい、可能な範囲で親も一緒に楽しめるとよいと思います。

私は「支援」の基本姿勢を次のように考えています。それができれば子どもが嬉しいだろう、楽しいだろう、満足だろうという事柄に、大人は手助けをしてあげるという姿勢です。知らなかったことを知る、わからなかったことが分かる、できなかったことができるのは嬉しいことであり、その嬉しさは将来ではなく今感じられることが大切だと思います。子どもたちは誰でも将来のためではなく、今日、今を幸せに過ごす権利があります。私たちが本当に心がけることは、今日一日が終わるとき子どもが「今日は楽しかった」と言える日を一日でも多くしてあげることではないでしょうか。子ども達の今を大切に、そうすると無理なことを子どもに要求することも少なくなるのではないかと考えています。

文責：和歌山県発達障害者支援センター ポラリス